

英語科

習得から活用へと結びつける書く力の育成

—「アメリカの中学生との文通交流」の実践を通して—

松尾 砂織

1. はじめに

本学校園は、平成22年度から創造的問題解決能力の育成に着目して研究を進めている。英語科では書くことの言語活動を通して創造的思考力を育成するための学習指導開発を行っている。

中学校学習指導要領解説外国語編には、「自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する観点から、『聞くこと』や『読むこと』を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、『話すこと』や『書くこと』を通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成する指導を充実する」¹⁾とある。そこで、本校の英語科では英語の基礎的な学力をつけるために「書くこと」に着目し、書くことによって創造的思考力を高め、それを生かすことでコミュニケーション能力の素地を養うこととした。そして、育成したい創造的思考力を、①創意工夫して何とか自分でやろうとする力、②自分の考えや気持ちを、初歩的な英語を用いながら他者に伝えようとする力、③他者とのコミュニケーションを通じて自分の表現方法を磨こうとする力、と定義した。創造的思考力は、習得した知識を活用して課題を解決する中で育成される。英語科においては、習得した知識や技能を活用して行うなどのコミュニケーション活動においても創造的思考を伴い、その思考は具体的には4技能の能力として表れる。本研究は、創造的思考力の育成を図りつつ、その結果として表れる4技能の能力の中でも、特に書く能

力の育成に着目し学習指導の開発を行うものである。書くことは、身近なことや自分のことなどを伝えるための、文字による表現活動である。また、知識や技能を総動員して取り組むことが必要な、コミュニケーション活動の中では最も高度な活動である。このような高度な表現活動を継続的に行うことで、生徒はそれまでに習得した知識や技能を十分に活用する機会を持つことができる。また、話し言葉と違って、書き言葉は記録に残りやすいため、読み返しや書き直しが容易である。その特徴を生かして、生徒に作品を通じて他者と交流させたり、他の作品から得た考えや表現を取り入れたりすることもできる²⁾。

本研究の目的は、誰に対して、何のために、何を書くのかという具体的な課題設定をすることに留意して、文法指導と書くことの言語活動とをさらに関連付けて書く能力を育成するための学習指導開発を行い、その成果と課題を明らかにすることである。

2. 研究の方法

(1) 対象生徒

広島大学附属三原中学校8（中学2）年生のうち、8年2組（男子20名 女子21名）合計41名の実践を中心に取り上げる。

(2) 調査時期および内容

6月～7月にUnit3の実践授業を行い、9月に手紙交流の授業実践を行った。

(3) 書くことにおける具体的な指導例

生徒が、まとまった英文を書くための具体的な指導方法の一例を以下に示す。

- ①一時間ごとに学習目標を提示し、学習課題に対する自身の取り組みのありかたを意識させる。
- ②これまでに継続している学習のふりかえりを継続実施し、毎授業習の終了時に、学習課題に対する自身の達成度を書きためさせる。
- ③既習の学習内容をくり返して指導し、基本表現の定着を図る。
- ④ワークシートをファイルにポートフォリオ式に保存させる。
- ⑤学習課題に対して、学習をふりかえるポイントを提示し、学習者自身が、自分の変容と学習効果を確認できるようにする。
- ⑥書いた作品をグループで交流し、他者の表現に触れさせる機会を作る。
- ⑦海外のペンパル校に書いた作品を送り、書くことに対する意欲を高めさせる。
- ⑧海外の姉妹校（ペンパル校）から届いた手紙を読んで、様々な考え方や表現方法に着目させ、生徒自身の表現に加えさせるようにする。
- ⑨書いた作品の文構造・文法事項における改善点を示し、次に書く作品に同じミスやエラーがないようにさせる。

3. 単元について

(1) 授業づくりの視点

対象とした単元は「Unit 3 E-pals in Asia」である。創造的思考力を生かすポイントおよび授業づくりの視点は、キーワードを含んだ要約文や、不定詞を使った自己紹介文を個人で考えて書き、それらを小集団で読みあう活動を通して、読み手に与える印象や感じ方に気づき、読みやすく分かりやすい英文へ校正しようとする力をつけることである。

(2) 生徒の実態

生徒たちは、発音練習や音読練習に対して積極的である。挙手して発表しようとする意欲的な生徒も多く、新出事項や類似表現に対する関心は高い。前単元 Unit2 での書く活動では、教科書のモデル文にならって、奈良の大仏の説明文を個人で

書き、グループで交流してから、新たな表現をつけ足して説明文を書いた。その結果、教科書の英文を借用するだけでなく、辞書を使って未習事項の動詞や名詞を用いて書く生徒も見られるようになった。しかし、生徒が書いた個々の英文を見ると、新出事項の使い方に間違いがあったり、辞書で調べて書いた単語の使い方が違っていたり、スペルの間違いがあったりして、正しい英語を書く力がついているとは言えない。

(3) 指導にあたって

指導にあたっては、ペアによる新出事項の口頭練習と音読練習を繰り返し行って、不定詞の用法と意味の理解を図る。音読の際には、書かれているおおまかな内容を、まず自分で理解できるように、リーディングポイントを与えて考えさせるように工夫する。書く活動においては、不定詞の副詞的用法と名詞的用法を用いて「自分の食べたいもの」「自分の行きたい場所と理由」「自分の好きなこと」など自分の身の回りのことを中心に書かせ、最終的には「自分の夢」について書けるように指導する。具体的には、教科書の借用だけでなく、辞書を活用したり、他の語句に置き換えたり、主語や動詞を代えたりすることによって、多様な表現ができることを指導する。また、書いた作品をグループで読みあうことで、文法的なミスに気付いたり、自分では考えつかなかった表現方法を知ったりする場を設定したい。書いた作品は、昨年度まで実施してきたアメリカのペンパル校へ送り、実際にペンパル交流をすることを通して、異文化に対する理解を深めさせたいと考えた。

4. 単元について

(1) 単元の目標

- 間違いを恐れず意欲的にコミュニケーションをする。
- 不定詞の副詞的用法の意味・構造を理解し、運用できるようにする。
- 不定詞の名詞的用法の意味・構造を理解し、運用できるようにする。
- 不定詞を含んだ文章を読んで、内容を理解

できるようにする。

- 不定詞を用いて、自分の考えを書くことができるようにする。

(2) 単元の計画 (12 時間)

- 第1次 Starting Out (1時間)
- 第2次 Dialog (1時間)
- 第3次 Reading for communication (2時間)
- 第4次 メールの書き方と私の夢 (2時間)
- 第5次 文通交流を行っているアメリカの中学生に向けた手紙 (3時間)
- 第6次 文通交流を行っているアメリカの中学生から届いた手紙を読み、その返事を書く (3時間)

(3) 単元の概要

本単元は、インターネットによる情報交換の疑似体験をねらった題材を設定しており、情報のテーマは「世界におけるマンガ文化」で、アジア諸国の子どもたちの共有の話題を主に取り扱っている。「マンガ」という日本語がそのまま世界で使われている点は、生徒が学習をする中で興味深い内容となっている。「マンガ」は生徒にとって身近なものであるため、異文化理解に関心を持たせることができる題材である。また、不定詞の副詞的用法を使ったアンケート集計結果の説明や、want to find など名詞的用法を用いた文を、対話の中の自然なやりとりの一部として導入することができる。本文中の名詞的用法には like to, hope to も用いられており、自分の好きなことや希望を述べる表現についても学ぶことができる。また、この単元で学んだ表現を用いながら、文通による交流を行っているアメリカの中学生に向けた手紙を書く活動へとつなげることができる題材である。

5. 授業の実際

(1) 具体的な指導内容について

① ペア活動による口頭反復練習の指導

生徒たちは、ペア活動による口頭練習を毎時間行っている。これは新出単語や語句、新出文を一

斉指導したのちに、毎日継続して反復練習をさせている。教室の生活班内で2人組のペアを作り、口頭練習を繰り返し行わせることで、不定詞の用法と意味理解の定着が図れるように工夫した。活動中の生徒の様子を見ると、2人組のペアを固定することで、互いの定着具合を確認し合いながら、新出事項の定着を図ることができたように思う。また、活動時間を一定にし、毎時間継続して実施し、生徒が英語学習に対して意欲や動機付けを高められるように意識して指導した。

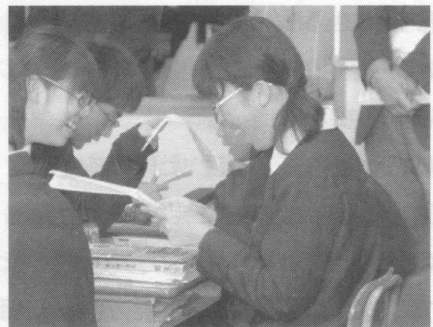


図1 ペア活動をしている様子

② まとまった英文を読み取る指導

教科書の本文だけに限らず、ある程度まとまった量の英文を読む際には、おおまかな内容をとらえる力が必要である。第3次では、教科書にあるまとまった英文に対するリーディングポイントを示して内容を読み取らせた。この指導は、読むポイントをしぼりこむことによって、まずは人に頼らずに、何とか自分で考えてみる姿勢を育てることと、読み取りを苦手だと感じている生徒の手助けになることをねらいとしている。これによって、読むことを苦手としていた生徒の中には、まずは自分自身で何とかやろうとする姿勢が少しずつ見られるようになった。第6次では、文通交流を行っているアメリカの中学生からの届いた手紙を読む活動を計画していたので、第3次で行ったことを元に再度学習することによって、定着を図ることができるようになると思われる。

③ まとまった英文を書く指導

新出事項の不定詞副詞的用法と名詞的用法を用いて「自分の食べたいもの」「行きたい場所と理

由「好きなこと」など身の回りのことを中心とした英文を、Unit3 で学習したメールの形式を活用して英語ノートに書かせた。まず、教科書のモデル文を参考にして辞書を用いながら、個人の力で書くように指導した。その後、個人で書いた英文を班内で読み合い、読んだ英文に対しての返事を英語で書くように指導した。もちろん分からない単語があった場合は、辞書を用いたり、指導者に質問をしたりしてもよいこととした。これまでの書く活動の多くは、個人で書き、指導者が添削をして返すことが中心だった。しかし、そのような添削では、文法指導はできたとしても、生徒の書く意欲を高めるものにはならなかった。そこで、誰に向けて書くのか、何のために書くのかをはっきりと設定して書かせるように変更した。今回は、アメリカの文通相手に手紙を書く目的があったので、まずは書いた英文を班員に読んでもらい、アメリカの中学生が読んで分かるかどうかを点検する意味で、読んだ英文に返事を書かせた。英文はメール形式で書いてあるが、本来ならばメールは Web 上で行うものだが、この紙面上での疑似メール交換は、生徒の意欲を高める教材だったようで、互いに書きあった返事を興味深く読んだり、書いた英文を書きなおしたり、書き加えたりする姿も見られた。

④海外の中学生に手紙を書く活動を通して、創造的思考力を生かす指導

Unit3 のまとめ学習は、文通による交流を行っているアメリカの中学生に手紙を書くことであった。広島大学大学院教育学研究科小原友行教授、深澤清治教授の働きかけで、2010 年からアメリカ合衆国にあるエップス中学校 (Eppes Middle School) の Ms. Joanne McClellan の助けを得て、クラス単位でのペンパル交流が始めている。この手紙交流は、年に 2～3 回で、8 年生と 9 年生を対象に実施している。手紙の内容は、自己紹介から始まり、好きなこと、年中行事、互いの国に対する関心事などである。今回は、Unit3 のまとめ学習といった位置づけなので、意図的に新出事項であった不定詞を用いて手紙を書くように指導した。また、書いたものを、小グループで読みあう活動を通して、読み手に与える印象や感じ方に気づき、相手にとって読みやすく、分かりやすい英文へ校正しようとする力をつけることもねらいとして指導した。具体的な指導としては、教科書の借用だけでなくとどまらず、辞書を活用して語句を一部変えると、オリジナルの英文になることを伝えた。また、書きたい語句のスペルが分からない場合は、辞書を活用して知っている他の語句に置き換えたり、主語や動詞を換えたりして書くようにも伝えた。

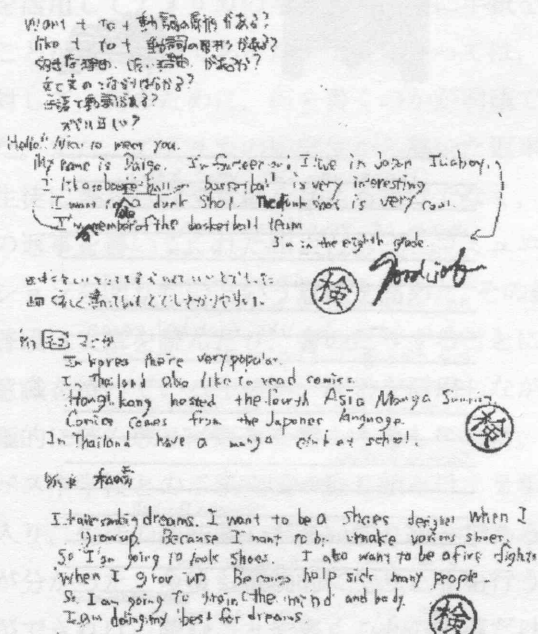


図2 生徒が書いたメール文

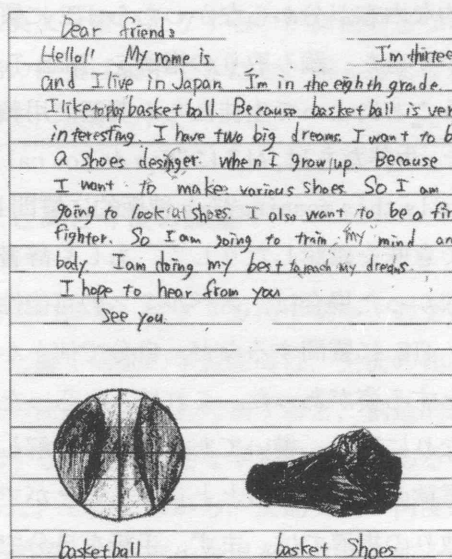


図3 完成した手紙

図3は完成した手紙の例である。Unit3で学習した新出事項の不定詞を用いた英文を、毎時間少しずつ授業の中で書きためさせ、書いたものを班内で読み合ったり、分かりやすく校正したりする活動を行っていたので、スムーズに手紙を書くことができた。生徒の中には、以前自分が書いた自己紹介文のワークシートを見て表現を借用する生徒もいた。

(2) 発展的な指導内容について

⑤読み取りと書く指導

Unit3の指導が済んでから、第6次を実施した。この学習は、Unit3で学んだことを活用する学習として位置付け、アメリカの中学生に向けた書いた手紙の返事が届いてから、その手紙を読み、その返事を書くための指導を行った。アメリカの学校からの手紙の返事は生徒一人ずつに届いており、読む活動と書く活動を行うには最良の教材となった。生徒一人ずつに手紙の返事を渡すと、手紙を食い入るように読む姿が見られた。しかし、アメリカの生徒が書いたハンドライティングを読み取ることは、非常に困難で、時間を要した。それは、ハンドライティングならではのくせ字による読みづらさと、スペルミスがあったからである。そこで、手紙を読み取る指導を本校のALTとのTeam Teachingで行うことにしたので、生徒たちは、ハンドライティングが読めなかったり、発音やアクセントが分からなかったりしたら、ALTに質問し、文法的な内容が分からなかったらJTEに質問することができた。読み取りの指導をTeam Teachingで行うことによって生徒たちの英語使用頻度が上がった。生徒たちは、ALTに“How do you call it?” “What is this meaning?”と積極的に質問したり、辞書で意味を確認したりして、もしも辞書に載っていない場合は、スペルミスの可能性があるので、JTEに質問するなど、自分で何とか読み取ろうとする姿があった。これは、もらった手紙を自分なりに読み、書いてあることを理解したいという意欲の現れであるにとらえることができる。読み取りの指導では、まず、手紙を自分で読みながら、ワークシートに写し、その段階でスペルミ

スがあれば赤字で修正させた。読み取りのポイントを与え、どのような内容が書いてあるかある程度予測しながら読めるように工夫した。生徒たちは、書き取りをしながら、読み取りを進め、日本語で概要をまとめるころになると、おおまかな手紙の内容を理解することができていた。日本語訳は、理解のための手段なので、全訳というよりむしろ、おおまかにどのような内容が書いてあるかまとめることを意識させた。

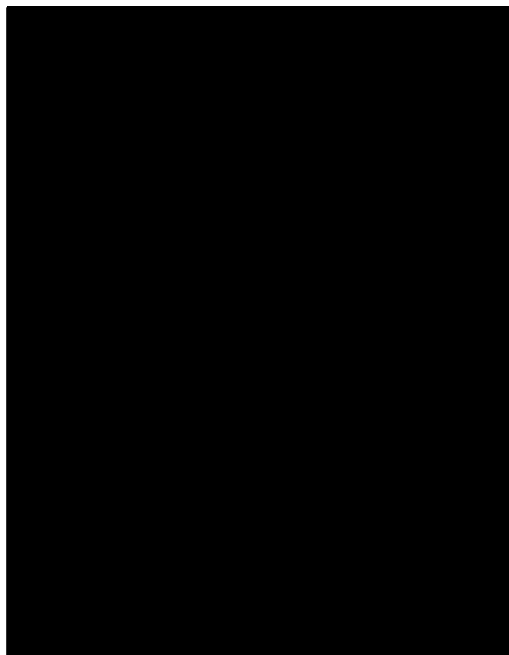


図4 アメリカの生徒のプロフィール



図5 アメリカの生徒からの手紙の返事

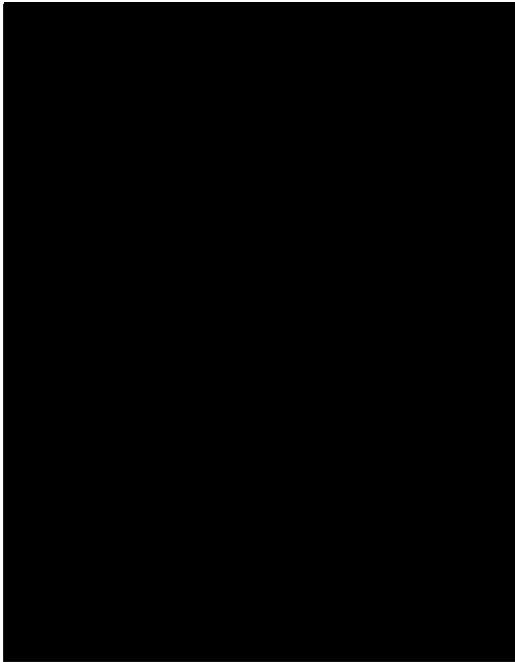


図6 図4の生徒へあてた手紙の返事

6. 結果と考察

本研究は、誰に対して、何のために、何を書くのかという具体的な課題設定をすることに留意して、文法指導と書くことの言語活動とをさらに関連付けて書く能力を育成するための学習指導開発を行うことであった。ここで取り上げた実践事例では、Unit 3を学習した後に、そこで学んだ表現を活用してアメリカの手紙交流相手に手紙を書くことが最終目標であった。生徒にとっては、誰に対して、何のために、何を書くのが明確であった。また、アメリカの中学生から届いた返事は、生徒に書く目的や意欲を与えるだけでなく、手紙の返事を書いてくれた相手ともっとコミュニケーションを図りたいという意欲を高めた。その結果、普段は文章を読んだり、書いたりすることに苦手意識を持っている生徒が、辞書を活用しながら積極的に読み取り、返事を書こうとしていた。エッペス中学校との手紙交流の取り組みは、2年目に入り、生徒の興味関心が高い取り組みであることが分かった。今後も継続的にやりとりを行うことができれば、読むことや書くことの指導だけでなく、異文化理解や関心を深めることができる指導

の在り方も考えることができると思う。

(生徒の感想)

- ・英語の手紙は分かりやすく伝わるように書けたのでよかった。
- ・自分なりに良い手紙が書けたのでよかった。また、have to の使い方も分かったので、きちんと復習しておきたい。
- ・助動詞など新しいことをたくさん学んだ。英語の表現の幅が広がったし、手紙もしっかり書けた。
- ・結構知識がたくさん入ってきました。それに、自分たちで考えて書く人もいて、結構良かったと思います。なので、これからがんばりたいと思います。
- ・今回は want to や like to を勉強しました。しっかり考えられたし、だいぶ覚えられたので良かったです。
- ・不定詞を勉強して、今までよりも幅広いことを表現できるようになったことが良かったです。
- ・ライティングノートに自分のことがしっかりかけたので、よかった。
- ・手紙やメールとかが特に印象深い授業だった。なぜなら、自分は文を作るのが苦手なので、がんばっていきたい。
- ・作文などを作った後の手直しもしっかりできたのでよかった。文法的なこともしっかりすることができた。
- ・私は英文を書いたりするのが結構好きなので、今回の授業は集中できたし、楽しむことができたので、良かった。

7. まとめと今後の課題

本研究の結果、アメリカの中学生との文通交流を通じた書く活動の学習指導は、生徒の作品やふり返りの記述などから考察すると、創造的思考力を育成するのに効果的な学習指導法であることが分かった。しかしながら、文通交流が何度か続くと、一度送った内容や表現を繰り返すのを避

け、新しい話題や表現にチャレンジすることが必要となってくる。そのためには、Unit 3で扱ったメールや手紙以外にも、書く活動を継続的に行い、新出文型を導入して、新しい表現を使用する場面を意図的に作っていく必要がある。また、書く活動と並行して、辞書指導をもっと積極的に行い、辞書の活用頻度も上げるように工夫した指導を行いたい。書く活動を続けていくと、自主的に辞書を用いて書こうとする生徒は増えてきているものの、全員ではない。学習指導要領でも「辞書指導の充実」が示唆されているので、書く活動を行う際には、必ず辞書を持参させ、授業の中で辞書を用いた活動を仕組めるようにしたいと考えている。

今回の実践は、中学校8（中学2）年生を取り上げたが、実際には中学校9（中学3）年生でもアメリカの中学生との手紙交流をする取り組みは授業の中で行った。図7と図8は、9年生の生徒がアメリカの中学生に書いた手紙の返事である。この学習指導は、8年生と同様に手紙の返事を読み取る指導と返事を書く指導を行った。つまり、アメリカの中学生から届いた手紙は、8年生に届いたものと同様にハンドライティングで書かれていたので、読み取りの指導は8年生と同様にALTとのTeam Teachingで行うことにした。しかし、9年生は分からない単語や語彙に出会っても、それで読むのを止めるのではなく、類推しながら手紙の内容を何とか最後まで読もうとする生徒が多かった。また、9年生の持つ既習事項の知識量と表現方法が8年生のそれとは大きく異なるため、8年生の書いたものと比べると文法的にも表現的にも内容が深い手紙を書く生徒が多かった。8年生と9年生に同様の学習指導法で同じ教材を指導することは非常に効果的であると思う。それは、書いた手紙が学習教材になるからである。もちろん書いた生徒の名前など考慮する点はあるにしても、様々な表現を学び、同様に書けるようになりたいとの意欲を高めるには、最良の学習教材と言ってよい。今度は、個人情報に配慮しながら、9年生の作品を8年生に読ませ、様々な表現方法に触れさせる機会を持たせたいと考えている。

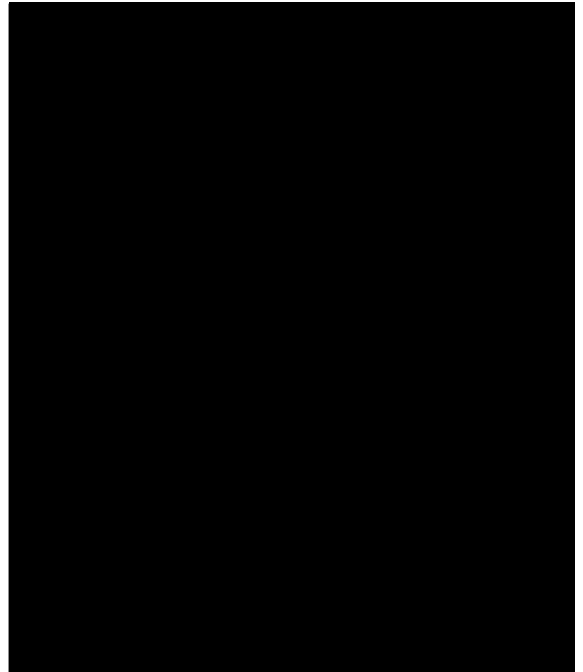


図7 9年生が書いた手紙の返事1

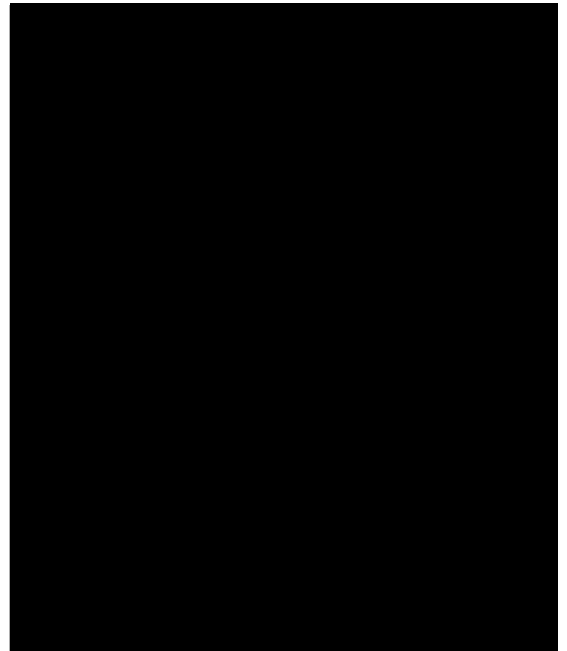


図8 9年生が書いた手紙の返事2

<注および引用文献>

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国編』, pp. 6-19, 2008, 開隆堂出版株式会社.
- 2) 松尾砂織・村上直子・柳瀬陽介・檜葉みつ子「書く力を養う英語科の教材および学習指導開発」, 『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』, 第39号, pp. 369-373, 2010. 3.